

生命の海科学館  
実施計画策定委員会報告書

平成 21 年 12 月

生命の海科学館実施計画策定委員会

## 生命の海科学館実施計画策定委員会 委員名簿

委員長 川上 昭吾 (愛知教育大学特別教授)

廣中 達憲 (蒲郡南部小学校長)

小林 憲三 (企画部長)

荒島 祐子 (海辺の文学記念館長)

石川 福二 (竹島水族館長)

遠山 達雄 (蒲郡市博物館長)

尾崎 弘章 (生命の海科学館長)

## はじめに

公募市民、各界代表者から構成され、平成 20 年度に設置された「生命の海科学館見直し検討委員会」では、廃止をも視野に入れて科学館の在り方が検討された。

検討の過程での委員の発言に次のような意見がある。

- ・ 「海は蒲郡の顔であり、最大の財産である。そして生命の起源でもあるこの海をテーマにした科学館を蒲郡のシンボルにしていくべきである。」
- ・ 「目で見ても、手で触れて。小さいころからのこうした体験は大切である。未来の子どもたちの教材として、夢として、心の糧として、科学館を残してやりたい。」

この二人の意見に代表されるように、「見直し検討委員会」報告からは生命の海科学館に対する大きな期待が感じられる。

最終的に蒲郡の将来のための財産として科学館を活用することが報告された。

「見直し検討委員会」の報告を受けて、科学館を改善するための具体的な計画を作成することを目的に「生命の海科学館実施計画策定委員会」(本委員会)が設置された。

本委員会は、市の玄関口である蒲郡駅から至近の距離にあり、また景勝地「竹島」へかけての蒲郡の観光・文化ゾーンの中心に位置している生命の海科学館を活性化させ、その再生により科学館がまちづくりの核としてこの地域に大きな波及効果をもたらすことをめざした。

委員会は鋭意検討を重ね、実施計画の成案を得たのでここに報告する。

なお、計画の実施と並行して協議していくべき課題も多く残されていることを付記しておく。

おわりに、本計画が早期に完全実施されることを期待する。

平成 21 年 12 月 11 日

生命の海科学館実施計画策定委員会

# 目次

1	現状把握	p. 1
2	誰もが利用しやすい科学館と なるための10の充実策	p. 4
3	科学館改装案	p.12
4	新しい科学館事業の考え方	p.15
5	科学館事業とターゲット	p.16
6	科学館活用例	p.17
7	他の施設との連携	p.20
8	評価 及び 財源についての再定義	p.22
9	順次計画策定事項	p.23
10	科学館の目指す姿	p.27

実施計画策定に当たり、議事録の確認とあわせ、見直し検討委員会の報告の内容を整理する。

## 「見直し検討委員会」報告書(平成20年12月)

「理科教育施設」、「科学教育普及施設」、「生涯学習・地域コミュニティの核となる施設」として活用

情報ネットワークセンターの機能と分離。科学館に独立性を持たせる。

専門の学芸員を配置すべき

中長期的な事業計画の作成と評価方法の検討

### 1 役割・使命

海をメインテーマとする。

私たちが住む地球、地球環境までも目指す。

体験的な要素を取り入れる。

学校教育と連携した理科教育普及施設

生涯学習及びコミュニティ活動施設

楽しんで科学する場の提供

利用者中心主義の追求

学校との連携と集客活動

生涯学習及びコミュニティ活動施設としての活用

観光スポットとして魅力アップ

1階の改装、1階と3階の分離状態を解消、科学館を前面に出す。

### 2 運営体制

科学館を情報ネットワークセンターと分離させると同時に、連携を図る。

専門学芸員の配置

### 3 運営方法

名称を変える。「生命の海科学館」はわかりにくい

入場料金の見直し 700円は高い。周遊パスポート

他の施設や大学・学校等との連携

### 4 評価

スタート3年後「評価委員会」を設置

# 生命の海科学館は

## わが国を代表する個性的な科学館

地球の誕生

海の誕生

生命の誕生

大気の生成

生物の進化

しかし現状では、  
わかりにくいため、理解されていない

生命の海科学館は、地球の誕生から生命の進化という他の科学館に見られない個性的な内容をテーマとした特徴ある内容を持った科学館であり、その内容から見れば、市民はこのような科学館が蒲郡市にあることに自信と誇りを持つべき施設となりうるものである。

しかしながら、「情報のショールーム」として情報化推進を目的とした施設設置が行われたため、展示の方法、説明の仕方など極めてマニアック(研究者向)であり、わかりにくいものとなっている。そして、そのわかりにくさによって、その価値が理解されず、科学館としての本来の目的を十分に発揮できていないのが現状である。

科学館としての機能を発揮するためには、このわかりにくさの要因を確認することにより、本来のあるべき姿を見つけ出すことが必要である。

情報化施設からの脱却、科学館の独立により、科学館本来の役割を追及していかなければならない。

- 1 展示に系統性を欠く
- 2 収蔵品の質は高いが、数が少ない
- 3 VITの質は高いが、使いにくい
- 4 暗くメモもとれず、恐さも感じる
- 5 収蔵品が過去の物のみで  
未来へのロマンを育みがたい  
～ 価値が認められなければ、  
経費がかかり過ぎと感じる～

科学館の今後の計画を策定するにあたり、科学館がわかりにくいものとなっている主な原因、科学館が十分に受け入れられてこなかった理由については、以下のものが考えられる。

(1) 展示が時系列の配置となっていないため系統性を欠く。そのため順路が途中で途切れることになり、混乱を招いている。

(2) それぞれの展示標本の質は高いと認められるが、数が少ない。数については、たとえ少ししかなかったとしても、それぞれの年代間をつなげるためのパネル掲示や説明案内で補完することができるのだが、そうしたものが見られない。そのため、科学館として必要な全体としてのストーリー性が感じられない。また、科学館として必要な、展示が「何を表現しようとしているのか」という原理の説明が伝わってこない。

(3) 展示案内は、VITと呼ばれる各展示脇のパソコン端末によって行われているが、VITの設置場所が動線を見越した配置となっており使いづらい。また、その内容は、良く整理されたものとなっているが、パソコンであるため一人でそれを占有することになり、団体での観覧が考えられていない。

(4) 科学館の主役である展示ではなく、情報機器を主体に設計されているため、館内の照度が落されており、メモも取れないほどの暗さで、恐怖心を覚えさせる。

(5) 展示が過去のものだけであるため、現代、未来へのつながりがイメージしにくい。生命の進化は、現代までつながっているものであり、そのつながりがイメージできないために未来へのロマンが育みにくい。

こうしたことにより、科学館としての価値が十分に伝わらなかったと考えられる。そして、その価値が認められないことが経費のかかりすぎる施設というレッテルを貼られる要因となっている。

**誰もが**  
子どもも、大人も、  
家族連れも、学校も  
**利用しやすい科学館**  
**となるための**  
**10の充実策**

これまでの反省を元に、誰もが利用しやすい、利用者のための科学館とするための改善策を考えていく。

- 1 わかりやすさの追及
- 2 子ども向けコーナーの設置(新)
- 3 未来に夢・ロマンを感じさせる「現世の海コーナー」の設置(新)
- 4 サイエンスショーの開催(新)
- 5 ワークショップの開催
- 6 サイエンス講演会の開催
- 7 サイエンス講座の開催
- 8 インタープリターの導入(新)
- 9 特設理科授業の実施(新)
- 10 出前授業の充実

# 1 わかりやすさの追求

「子どもにもわかる」を基本  
展示を時間の流れに沿って配置  
VITの動画をTVで提示  
メモがとれる明るさ確保  
簡潔な解説パネルの設置  
体験的展示の導入  
代表的な化石(三葉虫、アンモナイト等)を追加

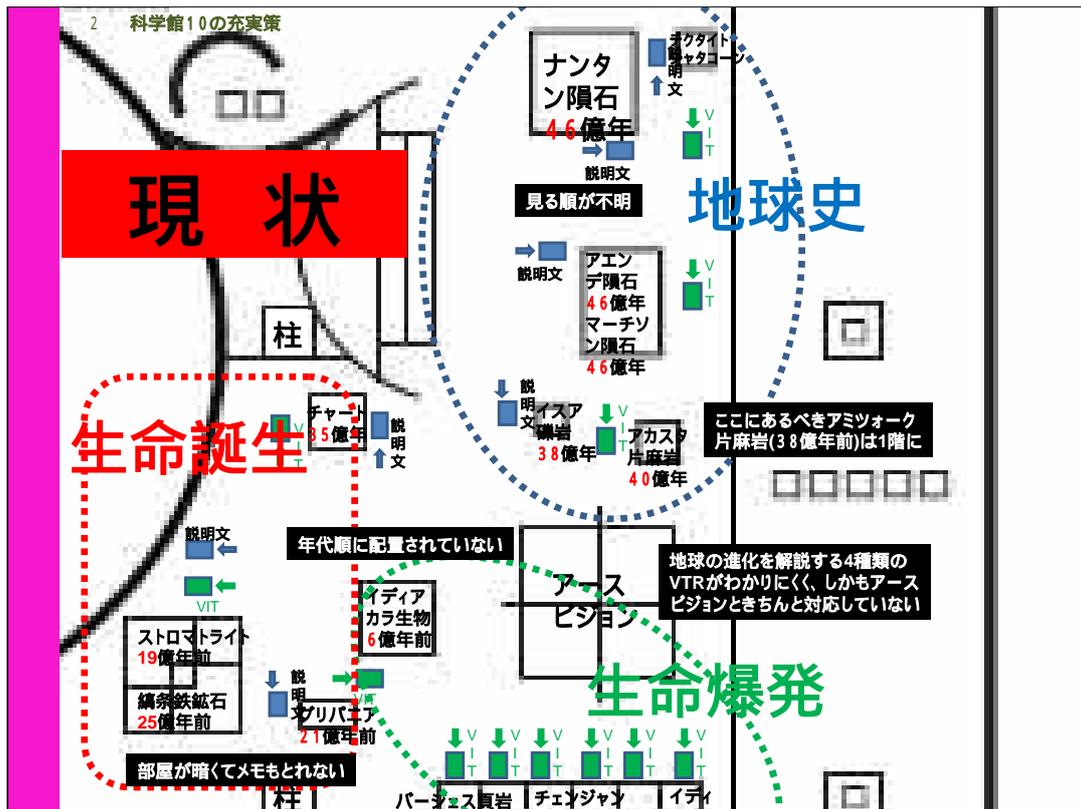
## 1. わかりやすさの追求

展示説明に必要な空間を十分に確保するため、現在有効に使われていないスペースを利用して、系統的、時系列に沿った配置に展示替えを行うことにより、わかりやすい展示とする。

再配置は、「子どもにもわかる」を基本とし、展示資料を時代区分ごとにグループに分けたうえで、グループごとの展示テーマや順路・内容の明確化を図る。また、各展示グループごとにモニターによる動画案内を設けることにより、多人数での利用を可能にする。

館内の明るさは、学習等での利用も考慮してメモが取れる明るさを確保し、簡潔な解説パネル等を各所に設置することで、ストーリーを途切れさせずに展示物を見て回れるよう工夫する。

また、楽しく学ばせ、更には新たな興味を起こさせるため、参加体験型展示を導入する。思い出に残る体験、おもしろいと実感できる科学館を目指す。そのために、価値本位の展示ではなく、その展示により何を伝えたいのかが分かるような原理本位の展示を工夫する。誰もが知っている三葉虫、アンモナイトなど代表的な化石を触ってもらえるような、石と鉄隕石の重さの違いが体験できるような展示を考える。「なぜ」という疑問を喚起し、「そうだったのか」という答えを得られるような科学館とする。



## 1 - 2 . 現状の展示配置

展示室の一部の現状を示したものである。大きなテーマに分かれているが、各テーマの区切りがなく、また、導線を考えたものとなっていないため展示を数点見た段階で次の順路が分からなくなり、科学館として意図したテーマに沿った観覧ができなくなってしまう。さらに、車イスや多人数では、通路となる空間が狭いために無理な順路を強いられることになる。

また、見通しのワン・フロアの展示形態は、入口を通過してすぐに出口横にある展示室内で一番大きなイクチオサウルスの化石が目に入ってしまう、そこまで一直線の経路をとってしまうということにもなりやすい。

## 2 子ども向けコーナー（新設）

子どもが海の科学に親しむことができるように、子ども向けの展示を新設

## 3 未来に夢・ロマンを感じさせる「現世の海コーナー」（新設）

太古の化石や岩石と、現在・未来の海をつなぐことができる展示

### 2. 子ども向けコーナーの新設

大学等の学術研究機関設置の科学館ではなく、公共施設として設置している科学館として考えると、そこでの展示は子どもでも理解ができ、楽しむことができることが望ましい。敷居を高くして学術者の研究のための施設とするのではなく、敷居を低くし誰もが親しむことができる中で、研究にも使えるような奥深さを用意しておくようにする。

科学館への導入部分として、将来を担っていく子どもたちが興味をもち、ロマンを感じられるようなコーナーを設置する。子どもの科学への興味は、科学に興味のない大人に対してもそこに興味を向けさせるだけの大きな力を持っている。この力は、科学館の将来の発展にもつながっていくものである。

### 3. 未来に夢・ロマンを感じさせる「現世の海コーナー」の新設

現在の科学館は生命誕生の初期までの展示となっているが、生命の進化は、現在、未来へとつながっていくものである。過去の不思議の探求はできても、今の展示では未来へのつながりを持たせる力が弱い。海をテーマとした科学館で、身近に感じられる現世の海の科学も紹介することにより、未来に夢やロマンを感じさせるようにする。

## 4 サイエンス ショー (新規)

～ 知的なおもしろさのある実演や講義～

**夏休み、土日等**

1回40～50人を対象

**時間**

30分間程度で、午前と午後各1回

**講師陣：**

(1) 専任

(2) 外部講師(「その道の達人」)

### 4. サイエンスショー

科学館事業は、単なる展示にとどまるのではなく、利用者が体験、参加できる事業を行っていくことが大切である。

知的な面白さのある科学実験などの実演や分かりやすい内容のレクチャーなど、科学館に来ることで新たな発見、体験ができるようなサイエンスショーを休日を中心に実施していく。常に新たな体験ができることは、リピーター確保につながるものである。

## 5 ワークショップ(1回30人)(新規) ～科学的な道具・おもちゃ等作製～

土、日曜日、祭日、夏休み等  
学校の要請があれば平日でも随時

時間： 1回30分間～45分間程度。  
午前と午後各1回

講師陣：

- (1) 専任
- (2) 外部講師

### 5. ワークショップ

ワークショップは、科学館のみならず多く開かれるようになっている参加型の事業であるが、サイエンスショーとあわせ、科学実験や工作、科学おもちゃの作製といった来館者自らの参加型事業として行っていく。

## 6 サイエンス講演会

年1回程度

講師 全国の著名人

## 7 サイエンス講座

科学に関連した話題を中心とした講座

## 8 インタープリター（新設）

展示の解説、ワークショップの運営等

### 6. サイエンス講演会

現在行われている「サマーレクチャー」や「名誉館長講演会」を発展させた形で、年1回程度のサイエンス講演会を開催する。全国の著名人などを講師に招き、科学教育普及事業の柱とする。

### 7. サイエンス講座

サイエンス講演会の補完事業として、科学に関連した話題を中心に講座(実験や観察、野外での自然観察なども含む)を開催する。

### 8. インタープリター(地球・生命史案内人)

学芸員と協力しながら展示の解説やワークショップの運営等を行う人員を配置する。

インタープリターは、一般的に「通訳」を意味する言葉であるが、科学館の展示や事業を分かりやすく来館者に通訳(解説)する人ということである。単なる解説員としての「教える」という立場ではなく、展示の解説という教育的な要素と参加者を楽しませるといったエンターテインメント性を持った立場で来館者と接していく人員である。来館者の主体性を重視しながら、館内での体験を通して、科学への興味を喚起し、ともに考え、理解を深めていくといった役割を担う。また、展示解説やワークショップ運営の全体構成を企画演出も行う。

## 9 特設理科授業(新設)

学校が平日来館時  
講師:専任スタッフ  
展示資料に関連した内容の講義

## 10 出前授業(充実)

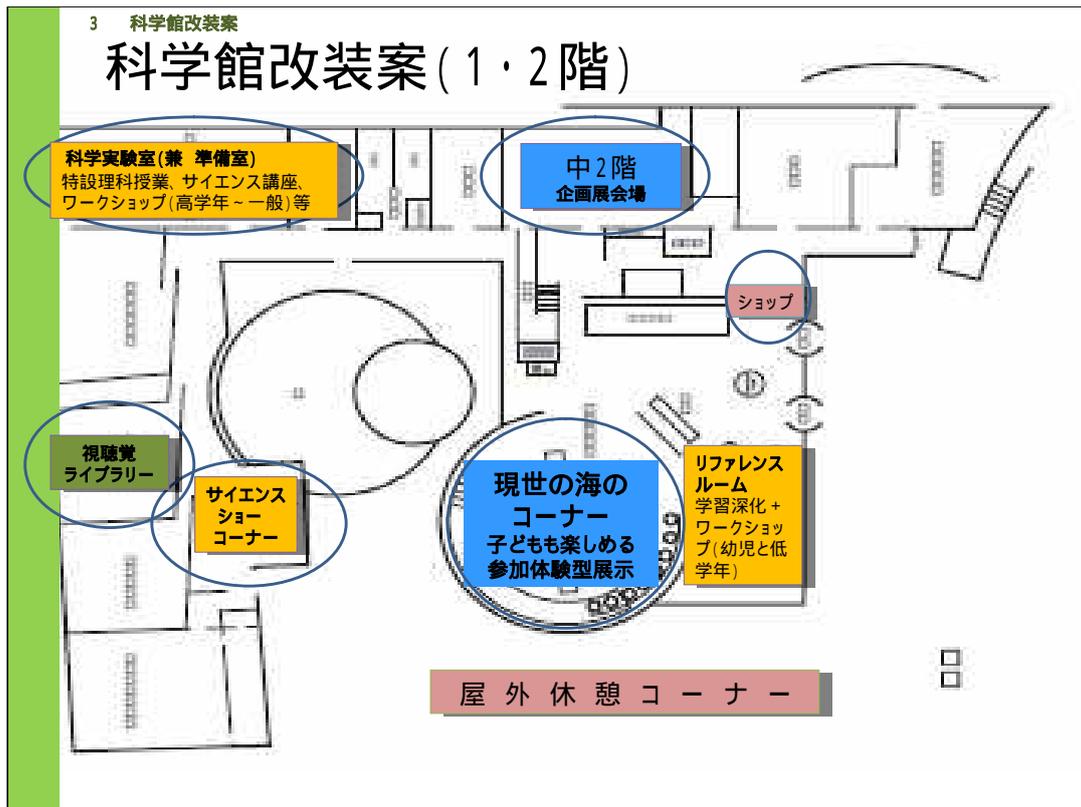
学校に化石と映像等を持参  
講師:専任スタッフ  
当館に関わる内容を講義

### 9. 特設理科授業

遠足や理科、総合学習での来館など、平日の学校団体の来館時に、学芸員やインタープリターなどの専任スタッフにより、学校の理科授業に関連した形での講義を行う。展示に関連した内容で行い、少ない展示標本と学校の理科授業の内容の間を埋めるような講義を行う。

### 10. 出前授業

科学館事業の普及啓発のため、学校に化石と映像を持参して出前授業を行う。年間計画の中で校外学習が組みにくい場合など、科学館が学校に出向くことによって積極的な科学(理科)学習支援を行う。



### < 館内再配置基本構想 >

新規事業、既存事業の充実のために、施設内で十分に活用されていないスペース(センター部分)を利用して科学館事業を行っていく。1、2階のスペースの有効活用により、館全体に関連性をもたせ、3階との分離を解消し、新規事業を行っていく。

これらのスペースのうち、ロビー部については、現在、情報プラザ、情報工房として利用されているが、これが科学館のイメージを醸し出すことができない理由であると指摘されている。また、利用者の状況からこのスペースでの情報化推進のための役割は終えていると考えられることから、科学館の顔としてのスペースに転用する。

現在の配置との対比は以下のとおり。

情報工房 リファレンスルーム

科学館としての図書閲覧をはじめ、展示内容に関連した科学パズルや実物標本に触れて楽しく学習深化を行うことのできるコーナーの他、幼児～小学校低学年向けのワークショップも開催できるようにする。また、市民や観光客が地域情報を検索するためのパソコンを置き、フリースポット利用も可能とする。

第三研究室 科学実験室(兼 準備室)

理科・科学の実験や工作ができる科学実験室の設備を整え、特設理科授業やサイエンス講座、ワークショップ(小学校高学年～一般)等に利用する。

共通スペース サイエンスショーコーナー

ガラス張りで開放的な飲食可能スペースとなっている共通スペース(休憩室)は、サイエンスショーのためのスペースとして併用する。

多目的室 視聴覚ライブラリー

多目的室を教育委員会の視聴覚ライブラリーとして利用する。

情報ロビー 現世の海のコーナー(兼 子ども向け展示コーナー)

科学館の展示スペースの一部として、子ども向けの参加体験型展示のコーナーに利用する。子どもたちが楽しく遊びながら科学に親しむことができ、また3階の展示の導入ともなる展示を設ける。( 図はコンセプト、イメージであり、実際の展示内容については、委託業者が決定次第検討に入る)

## 現世の海のコーナー(1F) 子どもも楽しめる参加体験型展示

### イントロダクション

身近な海に関する展示を展開し、夢とロマンを感じさせることができる空間

### 子ども向けコーナー

小中学生でも理解でき楽しめる、参加体験型の展示を導入し、子どもたちが自ら謎を見出すことができる空間

### 3階の展示への導入

来場者を3階へ誘う役目をもつ空間

#### <1階の「現世の海コーナー」の役割>

##### イントロダクション

1階の吹き抜けロビー部は、入館してすぐに目に入る、科学館の顔となる場所である。地球史や生命史といった科学館の本題にすぐに入るのではなく、受け入れられやすい現世の海(蒲郡の海を含む)に関する展示を展開することにより、イントロダクションとして誰もが楽しめるような空間をつくる。

##### 子どもでも楽しめるコーナー

小中学生でも理解でき、楽しむことができるようなスペースとする。

##### 3階展示への導入

この空間を海の中に見立て、階段で3階に上がって行く過程を海の歴史をさかのぼる時間旅行に見立てるなど、3階への導入とする。

#### <1階の「現世の海コーナー」のコンセプト>

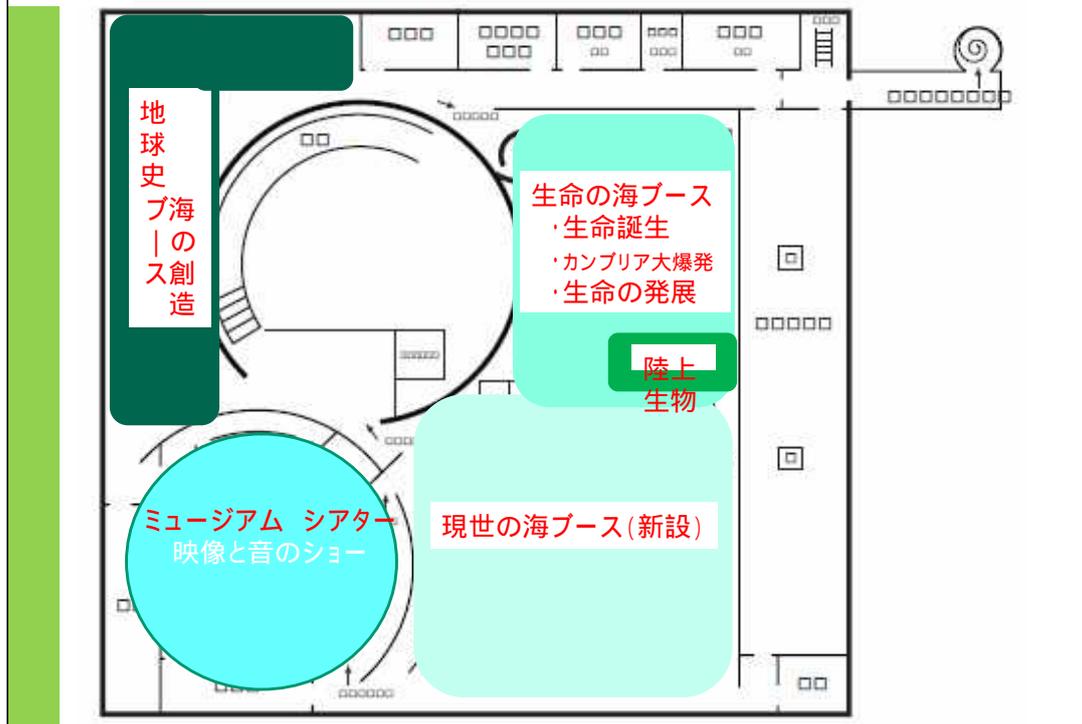
蒲郡市の財産でもある「海」をテーマに、吹き抜けとなってガラスに囲まれた広い空間を最大限に利用し、夢、ロマンを感じさせることができるような世界を展開する。

その他、1階の現世の海コーナーのコンセプトは以下の通り。

- ・日常の当たり前と思っていたこと(身近な海、身近な自然)が、世界の海、世界の自然とつながっていることを知ることのできるコーナーとする。
- ・普段気付かない不思議に気付かせるコーナーにする。
- ・答えが知りたくなるような謎を、子どもたちが自ら発見することのできる場にする。
- ・その謎の答が3階にあることを伝え、来場者を3階へ誘う役目を持つ場とする。

(実際の展示内容については、委託業者が決定次第検討に入る)

### 3階 時間の流れに沿って展示品を再配置



#### (3階展示の再配置)

3階の展示は、フロア全面を活用して再配置を行い、各テーマごとに参加体験型展示を設けることで、分かりにくさの解消と、楽しみながら学ぶことのできる空間づくりを行う。また、3階すべてを使うことで、3階の受付は撤去する。

再配置は、時系列に沿った配置とし、既存の映像コンテンツを活用して動画で説明を行う。プロジェクター等の維持経費のかかる機器を大型液晶モニターなどに置き換えることにより経費の削減を図るとともに、館内を明るさを確保する。

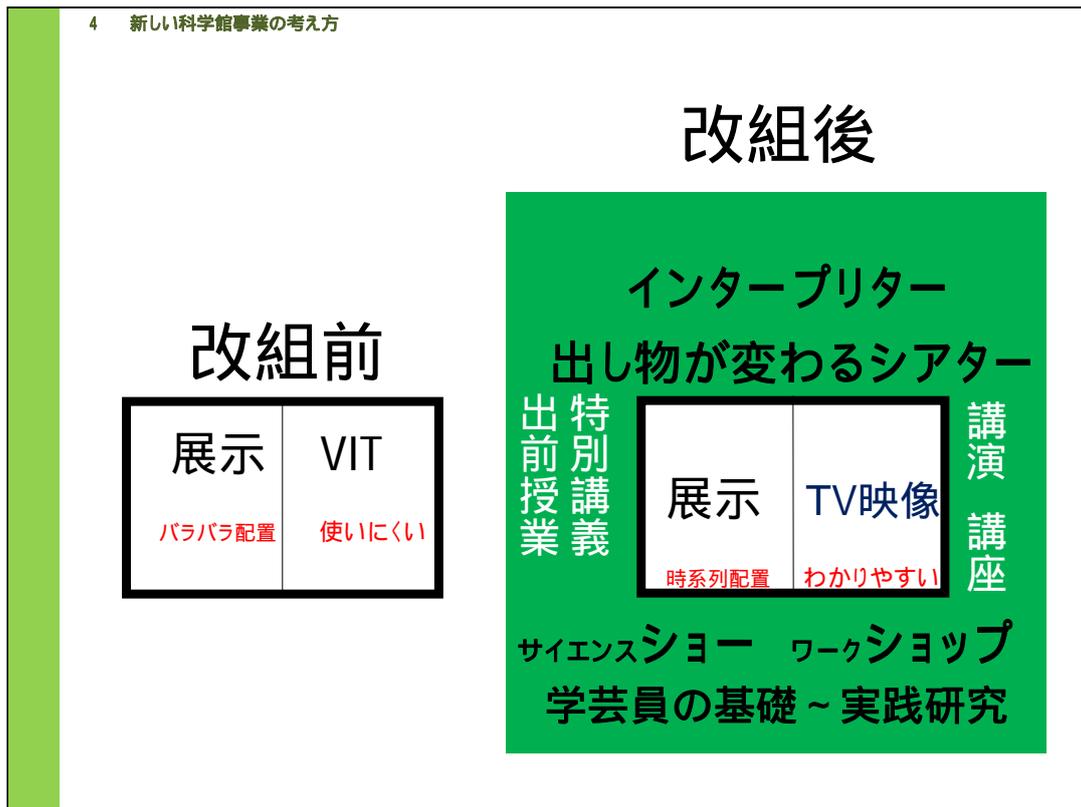
その他主な内容は以下のとおり。

解説パネルの設置により、展示を分かりやすく案内する。

年代の流れが分かるような掲示案内を設ける。

各テーマごとに体験型の展示を導入する。

( 図はコンセプト、イメージであり、実際の展示内容については、委託業者が決定次第検討に入る)



< 新しい科学館事業の考え方 >

展示については、一旦作成した後は、常に更新し続けることは難しい。予備の標本等の収蔵資料を確保していなければなおさらである。

しかし、サイエンスショーやワークショップ等は、十分な設備を整えておけば、シナリオやプログラムを更新することで、常に新しいものを提供することができる。

生命の海科学館が日本でも有数の個性的な科学館であり続けるために、標本や資料を充実させてわかりやすく展示を行っていくことは重要なことであるが、リピーターを確保しつつも新しい科学館であり続けるためには、サイエンスショーやワークショップをはじめ、講義や講座などソフト面で内容を更新していくことが重要となる。

## 各事業のターゲット

重点8項目	平日	休日
1 現世の海の新展示 <small>(小中学生向けコーナー新設)</small>	親子	親子
2 展示を再配置しわかりやすく	一般	
3 ミュージアムシアター	学校	一般
4 サイエンスショー	-	
5 ワークショップ	(学校) 要請があれば実施	-
6 特設理科授業	学校	
7 出前授業	学校	-
8 サイエンス講座・講演会	一般	一般 (講演会)

### <事業のターゲット>

事業の実施に当たっては、それぞれの事業の対象を明確にし、展示の更新や事業実施を行っていく必要がある。平日、休日(夏休みなど長期休暇含)それぞれについて、また、誰を対象に行っていくのか、そのターゲットを明確にすることにより、意義ある事業実施が可能となる。

## 科学館活用例

### 1 家族連れ(子どもと父母・祖父母)

#### モデルコース

- 1 一般型 1.5 ~ 2時間  
1階(20分) ⇨ 3階(60分) ⇨ シアター(20分)
- 2 体験型(サイエンス・ショー、ワーク・ショップ)  
サイエンス・ショー(30分) ⇨ ワーク・ショップ(45分)
- 3 1と2の両方 2 ~ 4時間

展示の更新及びソフト事業の実施後における、利用者との関係をモデルコースとして例示する。モデルコースの設定は、事業の実施計画を策定する上でも、また、科学館を宣伝、周知する上でも有効であると考えられる。来館者予定の旅行計画を立てやすくし、誘客効果を高めていく。

また、学校等の利用についても、科学館が果たしうるその目的を明確にすることにより、校外学習としての候補地として選びやすい施設とする。

#### 活用例1

# 科学館活用例

## 2 県外ビジター

蒲郡観光の一貫として、  
**特色ある科学館(生命と海)訪問**  
を位置づけ得る。

モデルコース(所用 1.5 ~ 2時間)

1階(20分) ⇨ 3階(60分) ⇨ シアター(20分)

活用例2

## 科学館活用例

### 3 学校

- 1) 科学に親しむ場として
- 2) 生活科の校外学習の場として
- 3) 理科授業の動機付けや発展学習の場として
- 4) 遠足の対象として

活用例3

# 他の施設等との連携

## 1 集客・広報の連携



各々が連携して蒲郡の魅力をアップ

**モデルコース:** 午前は文化施設を1、2見学し、その後蒲郡の温暖な自然を一つ体験。文化と自然を大満喫

家族旅行にしても、学校の遠足にしても、特に遠方から訪れようとする場合には、1日かけて楽しめるような施設でない場合は、目的とする地域で、複数の施設組み合わせによる連携が大切である。

海辺の館の連携はもとより、風光明媚な蒲郡全体として、自然体験と文化体験の組み合わせなど、これまでよりも幅を広げた体験ができるような連携策を検討していく。

館の連携については、既にメールマガジンや共同企画事業など行われているが、モデルコースを示した案内の作成や共通入場券など連携事業として実施可能な事業を積極的に行い、集客活動をしていく。

## 他の施設等との連携

### 2 事業に関する連携

- ・イベント時期の調整
- ・連携した企画の実施 等

海辺の文化教育ゾーン全体での  
リピーター確保

イベントの時期の調整や、共同での開催を企画するなどして、海辺のエリアを賑わいあふれる文化教育ゾーンにする。

来館者が一つの館で得た知識と体験を他館でさらに深め拡張することができるよう連携を図っていくことで、海辺のエリアがひとつの大きな文化施設のように機能し、蒲郡市民の文化教養の向上に、より効果的に寄与することができると考えられる。他館との連携を通して、海辺のエリア全体としてのリピーター確保に努めていく。

## 評価 及び財源についての再定義

### 科学館の求める「収益」とは何か

営利目的で行うのか…否  
利用者の満足感、喜び  
成長する科学館のために

科学館の運営に当たっては、「科学館は、元来、収益を得るための施設ではない」という認識が必要である。

言うまでもなく行政運営に当たっては、「最小の経費で最大の効果」が発揮されることが求められているが、この最大の効果を収支の比率だけに求めてきたきらいがある。

科学館の収益、効果は、「使命をどれだけ果たしたか」によって判断されるべきものである。生命の海科学館の使命とは、生命の海科学館見直し検討委員会の報告書で提言された「理科教育施設」、「科学教育普及施設」、「生涯学習・地域コミュニティの核となる施設」としての役割を果たすこと、と考えられる。即ち、その成果をはかる指標となり得るのは、(1)理科教育への貢献度、(2)科学教育普及への貢献度、(3)生涯学習・地域コミュニティの核としての貢献度である。

これまで科学館の成果の指標を収支比率に求めていたため、収入増が見込めなくなると支出削減に全力が注がれるようになり、使命を果たすためになすべき科学館事業そのものの改善がおろそかになっていたと考えられる。

経費削減は当然しなければならないことであるが、それは科学館としての目標ではない。たとえ収入がなくても必要な施設であるということが文化施設運営の前提である。収入がなくとも施設の存在価値が認められるような事業を行っていく必要がある。

総トータルの費用を持って赤字、黒字を論ずれば、どれだけ立派な事業を行おうと黒字になることは考えられず、その対処のための経費削減、魅力低下の悪循環から抜け出すことはできない。金銭収入は、「新たな成長のための財源確保策」と考えていくべきである。

市の厳しい財政状況の中で現実には難しいことであるが、考え方として、公共施設としての科学館の存在意義は、その「事業の内容」で市民に還元し、そこで得た金銭収入は科学館自身の新たな成長のために使っていくことが許される(認められる)事業を行えるようにするべきである。

# 順次計画策定事項 1

## (1) 運営体制

学術委員の新設

外部評価委員の新設

インタープリターの導入

生命の海科学館見直し検討委員会の報告で指摘された項目すべてに対して、事業計画を策定していかなければならないが、順を追って行わなければ計画の方向が定まらない項目もある。これらについては、年次計画において順次計画策定を行っていく。

### (1) 運営体制

専門学芸員の採用については、平成21年10月1日付で正規職員として学芸員の採用が行われた。学芸員は、今後の科学館事業を進めていくために必須の存在であり、正規職員の採用は、科学館にとって大変大きな力となる。

見直し検討委員会では、情報化部門から科学館部門の独立が提案された。しかし、人事配置については、見直し検討委員会から実施計画策定委員会の事務まで一貫して情報ネットワークセンター職員によって行われていることから、リニューアル、再出発まではこの組織体制のままで行い軌道に乗せることが必要である。更新事業を軌道に乗せたのちに人事、組織の問題として改めて考えるべきことである。

なお、平成22年度からインタープリターを導入する。また、リニューアルオープンと同時に学術委員、外部評価委員を新設する。

学術委員については、生命の海科学館の展示に即した研究分野におけるそれぞれの第一人者(3～5名程度)に依頼する。研究成果や論文の提供、サイエンス講演会の講師などを通して科学館の学術面を支え、また科学館を研究を通じた社会貢献の場として活用して頂く。

外部評価委員については、概ね3年毎に事業の方向性を確認していくような事業評価を行うための委員であり、見直し検討委員会委員を始めとした外部の方々にご協力を頂く。

## 順次計画策定事項2

### (2) 運営方法

#### 名称

実際の科学館リニューアルの内容に即して、  
名称変更、および愛称募集等の実施を検討する

#### 料金

実際の科学館リニューアルの内容、規模、  
その後の事業計画など他の改善計画と並行して  
検討を行っていく

### (2)運営方法

#### 科学館の名称

名称の変更は慎重を要するものである。科学館の目指すところを伝えるという意味では、例えば自治体名を冠しただけの「蒲郡市科学館」という名称よりも「生命の海科学館」の方が館のテーマ(コンセプト)を表して分かりやすい名称と言える。館外の道路標識や看板なども「生命の海科学館」と表示されており、その名前で各所に周知されて来たというこれまでの積み重ねがある。一方で、「生命」を「いのち」と読ませることから、読み方が分からないとの指摘もある。リニューアルを機に科学館の名称を変更するかどうかについて、愛称の公募なども視野に入れ、リニューアルの内容に沿って検討を行っていく。

#### 入館料

科学館の収入の捉え方については既述のとおり(24ページ「評価及び財源についての再定義」参照)であるが、現在の大人700円、小人300円という料金体系は、他の科学館等類似施設の料金から見直しの必要があると考えられる。実際の科学館リニューアルの内容、規模、その後の事業計画など他の改善計画と並行して検討を行い、必要な改正を行うものとする。

# 順次計画策定事項3

## (3) 数値による目標

### 事業費 入館者数

#### (3) 数値目標

##### 事業費

科学館の事業費目標の算定に当たっては、これまでと同様にセンターとの複合施設であることの考慮が必要となってしまうが、兼任する職員の人件費を除き、より明確な事業費区分を行っていく。これまでセンター施設として捉えられていた1階部分の映像機器などを、その目的によって科学館の事業費に組み入れ直すなど、これまでの区分と一時的に整合しにくい事業費区分となることが予想されるため、対比して検討できるようにする必要があるが、現段階では、支出科目である情報ネットワークセンター費(施設全体)のくくりの中で考える。

情報ネットワークセンター費については、人件費を除く事業費の決算ベースで開館当初からこれまでで約半分に経費削減が行われており、削減努力も限界に近い。経費削減の追及で、科学館のあり方自体の改善が不十分であったことは先に指摘したが、これまでの努力を活かすよう、リニューアルのための費用等一時的な支出を除き、継続的な事業運営のためにかかる経費については、現在の節減状況を維持していく。

##### 入館者数

科学館の入館者数(常設展示部分)は、開館年度の4万8千人(8か月)をピークに翌年から減少し、5年経過で半減の2万人となり、その後の5年間横ばいで推移してきた。

今回の科学館見直しによるリニューアルでは、比較対象となる常設部分で現在の約2倍にまで入館者を呼び戻す。さらに、同時に開始するサイエンスショー、ワークショップ、出前授業等のソフト事業により、大幅な科学館事業への参加者増を目標とする。また、そのソフト事業によってオープン効果の弱まるリニューアル翌年度からの減少を最小限(目標:20%以内)に食い止めていく。

をこれまで(H12~H20)と将来(H23~H31)の9年間の比較としてまとめると、人件費を除いた運営経費約2億6千万円(27%)減で、入館者数約6万人(26%)増である。

## 順次計画策定事項4

### (4) 評価方法

#### 理科教育への貢献度

学校教育における理科の教育効果による評価

#### 科学教育普及施設としての貢献度

科学館利用者の科学意識向上の度合いによる評価

#### 生涯学習・地域コミュニティの核となる施設としての貢献度

利用者満足度による評価

#### (4) 評価方法

科学館事業の歳入・歳出といった収支状況については、当局の収支監査、市民の代表である市議会における予算・決算の承認・認定を毎年度受けており、定期的な評価と点検がなされている。しかし、実施した事業そのものに対する来館者の感想がこれまで評価の中に十分取り入れられてこなかった。

「評価及び財源についての再定義」の項目で述べたとおり、科学館の収益、効果は、「使命をどれだけ果たしたか」によって判断されるべきものである。生命の海科学館の使命とは、「理科教育施設」「科学教育普及施設」「生涯学習・地域コミュニティの核となる施設」としての役割を果たすこと、と考えられる。即ち、その成果をはかる指標となり得るのは、理科教育への貢献度、科学教育普及への貢献度、生涯学習・地域コミュニティの核としての貢献度である。

理科教育への貢献度については、学校との連携により教育効果の測定を行うことではかることができると考えられる。

科学教育普及施設としての貢献度は、来館者等の科学意識向上の度合いに反映されると考えられる。

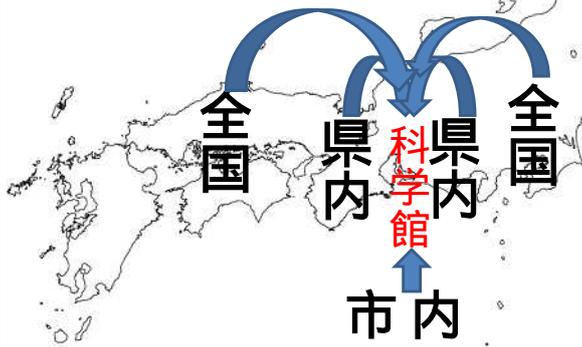
生涯学習・地域コミュニティの核となる施設としての貢献度は、利用者満足度をもつてはかることができると考えられる。

教育研究やアンケート調査、来館者調査などの手法によりこれらを定量化したものを科学館の収益・効果とし、評価を行う。加えて、科学館利用者の生の声などの数字に表わせない評価は、そのままの「声」として伝えられるような工夫をしていく。

次の事業計画に役立たせるために、毎年度このような評価の集約、点検を行うとともに、科学館の活動を年報としてまとめていく。

さらに、概ね3年毎に、見直し検討委員会委員を始めとした外部の方々にもご協力いただきながら事業の方向性を確認していくような事業評価を行う。

# 知を探究できる 個性的で魅力的な 科学館





以上